

観光開発と世界遺産—中国雲南省麗江を訪ねて

山下晋司

(東京大学大学院総合文化研究科)

中国には「万里の長城」はじめ 37 の世界遺産がある (2008 年現在)。この数はアジア諸国のなかではトップである。2 位はインドで 28、3 位は日本で 14。その意味で中国はアジアにおける世界遺産大国だ。

2008 年 7 月に訪れる機会があった雲南省麗江は、少数民族ナシ族のホームタウンとして、チベットとの交易によって栄え、独自の景観を作り上げた。これが「麗江古城」と呼ばれる旧市街である。この旧市街の文化景観が、1997 年に世界遺産として登録され、今日、一大観光地となっている。

麗江観光局によると、世界遺産になる前、1996 年に麗江古城を訪れた観光客は 106 万人だったが、2007 年には 433 万人に達している。世界遺産登録後の 10 年間に観光客は約 4 倍に増えたことになる。観光客の内約 9 割は中国人観光客で、中国の国内観光の隆盛ぶりがうかがえる。私が訪れた時期は、夏休みのハイシーズンということもあって古城の狭い石畳の道は観光客でごったがえしていた。ちなみに、広州で見かけた「昆明、大理、麗江 7 日間」というツアーは 1288 元 (約 2 万円) で売られていた。2007 年の古城区の観光総収入は 47 億元 (約 700 億円) に上る。

こうした世界遺産麗江をめぐる観光開発のあり方に対し多くの疑問もある。山村高淑らは「地域のくらし」という視点からこのような世界遺産のあり方を批判し、「世界遺産なんていない」とさえ述べている (山村ほか 2007: 3)。つまり、世界遺産になることによって、麗江の人びとのくらしを支えてきた川は汚れ、古城の「保護民居」は専用の住宅からゲストハウスやレストランに変わった。また、古城に住んでいたナシ族が郊外に移住し、非ナシ族の流入が増える傾向にある。例えば、2007 年末の時点で、古城のゲストハウスの数は 379 戸だが、自らが経営している「自主経営戸数」は 98 戸に過ぎず、「承包経営戸数」、すなわちよそ者に請け負わせて経営しているゲストハウスは、その約 3 倍の 281 戸に登る。古城の住民の多くはいまやよそ者にとって変わられ、古城は観光客のために存在しているのである。

しかし、今回の麗江訪問の際に会うことができた C さんは古城の民居に住んでいるが、一部をゲストハウスとしてオープンにしている。彼によると、麗江が世界で有名になり、いろいろな人がやってきて、いろいろなことを学べるので、多くの観光客が来ることはよいことだという。ナシ族は決して閉鎖的な民族ではない。彼の妻はペー族だし、彼の息子の嫁は漢族だ。いろいろな人と交じり合うこととナシ族の文化を守っていくことは矛盾しないというのだ。そもそも麗江はチベットとの交易で栄えたわけで、ナシ族を中心とし

つつもさまざまな民族の交流のうえになりたったわけで、ナシ文化とはある種のクレオール文化に他ならないと言ってもよいかもしれない。インドネシアのバリと同様「伝統文化」を本質化して考えることは、事実と反するだろう（山下 1999）。

民族文化に焦点を当てた観光開発は、今日中国の少数民族の経済開発にとってきわめて大きな意味を持っている。とりわけ隆盛する世界遺産観光は文化の資源化という点からきわめて興味深い。世界遺産観光における文化の資源化は少数民族に経済開発だけでなく、別のかたちでアイデンティティ・ポリティクス（政治的アイデンティティ）の機会も与えるだろう。これは現代中国の「多文化主義」を検討するための重要な切り口でもある（He 1995: 78）。

だが、民族文化の「伝統」も「遺産」もトリッキーな概念である。それは過去から未来へと保存され、受け継がれるものとイメージされる。しかし、デービッド・ハリソンが論じているように（Harrison and Hitchcock eds. 2005: 7-9）、事態はけっして単純ではない。誰が遺産と決定するのか。誰が遺産のステイクホルダーなのか。だれが真の関与者なのか。何を伝統とし、遺産とするかは政治と経済のプロセスそのものに関わるのである。世界遺産の場合は、ユネスコの世界遺産委員会が遺産を決定する。ただし、委員会は各国から提出される暫定リストの申請に基づいて決定するので、申請するのは各国の政府関連機関ということになる。ということは、ローカルからナショナル、そしてインターナショナルな複雑な連続体のさまざまなネゴシエーションのなかで遺産が決定されているのである。「普遍的な価値」とはそうした交渉の産物でしかない。

このように考えると、世界遺産における文化の資源化の主体は、あるアクターだけに限ることはできない。世界遺産観光においては、ローカルな文化は、ナショナル、さらにグローバルな視野の相互作用のなかで観光資源として立ち上がっていくのである。そこにおいては、誰が、何を、何のために、誰のために、文化／遺産を資源化するかという問題がもっとも先鋭なかたちで現れてくる。しかも、資源／遺産を活用するのは現在生きている人びとであり、未来の子どもたちなのだから、資源／遺産は未来にも開かれたものでなければならない。葛野浩昭（2007）がフィンランド・サーミの事例から論じているように、それは「ローカルかつグローバル、過去遡及かつ未来志向」という大きな時間と空間に向うものである。そのひろがりのなかに、たとえ困難であっても、世界遺産を地域や国家や時代を越えた文化資源として論じることの大きな意義があるように思われる。

参照文献

葛野浩昭 2007 「ローカルかつグローバルな資源へ、過去遡及かつ未来志向の資源へ—北欧の先住民族サーミ人による文化の管理と表現の試み」 山下晋司編『資源化する文化』（資源人類学講座2）弘文堂。

山村高淑，張天新，藤木庸介 2007 『世界遺産と地域振興—中国雲南省・麗江にくらす』世界思想社。

山下晋司 1999 『バリ—観光人類学のレッスン』東京大学出版会。

Harrison, David and Michel Hitchcock eds. 2005 *The Politics Of World Heritage: Negotiating Tourism And Conservation (Current Themes in Tourism)*. Multilingual Matters Limited.

He, Baogang 2005 *Minority Rights with Chinese Characteristics*. Will Kymicka and Baogang He eds. *Multiculturalism in Asia*. Oxford University Press.